

老舍『火葬』試論

渡 辺 武 秀

On Lao shê (老舍)'s "Huo Tsang (火葬)"

Takehide WATANABE*

概 論

《火葬》这篇小說是老舍在一九四四年发表的長篇小説，是在抗日战争时期被日军侵犯的文城展开的故事。王举人和他女儿——梦莲是重要的登场人物。我认为作家主要是通过对他们俩的描写把主题传给我们读者，所以，如果我们要了解作者的创造意图，我们就应该注意王举人和她女儿。

先说王举人；王举人是文城的头面人物，原来并不坏人，梦莲也喜欢他。但是日军侵犯文城之后，王举人就“居然接受了敌人的命令作了维持会会长”（十一）。为什么？王举人对梦莲声明“为了房子，地，衣食，我没有别的办法，还有，为了你梦莲——我不能不投降！”（十一）。他别的都不要，当然权利和利益也不要。他只愿意好好地保住“房子、地、衣食、孩子”而过老年的日子。“房子、地、衣食、孩子”大家都知道特别重要，大家也都要保住。假如在和平时期，恐怕由于这个理由，王举人做什么，谁也不会反对。但在抗日战争时期，即使为了“房子、地、衣食、孩子”王举人也是不能随便作的。不仅不能作，就是作了也没有用。因为日军是“野蛮，无情，残忍”（二十七）的，他们随意地放弃跟王举人合作。所以，他做了维持会会长也没能保住这些。但是王举人到了监狱——至死也不明白这个道理，还继续相信保住这些的办法就是跟日军合作。王举人缺乏抗争的精神，怕血，怕死。

梦莲跟王举人相反，她一听父亲做了维持会会长，就想逃脱自己家，离开王举人。她认为战争时期有战争时期的态度和想法，所以，梦莲努力地改变自己，产生了跟日军抗争的想法。她渐渐地觉悟到为抗争而死，死里有生。抗争就会流血、死亡，为了正义——她宁愿选择流血、死亡。

Key words: war, army, Japanese

はじめに

この『火葬』は雑誌『文芸先鋒』の第4巻の第1期（1944.1）から第6期（1944.6）に発表されたものであり、老舍（1899-1966）にとっては、すでに雑誌『抗到底』第4期（1938.2.16）から第23期（1939.3.16）に発表した『蛻』以来の、久しぶりの長篇小説となる。

この『火葬』については、以下のような評価がある。

一般的に「火葬」は失敗作とたたけられているが、戦争を真正面から描いた作品はこれが初めてである。…（略）…次作「四世同

堂」の手慣らしとなったことの意義は大である。^(注1)

この記述からすでに察することができるように、この作品は「一般的に」「失敗作とたたけられ」ており、老舍の作品の中では、ほとんど注目されていないのである。また、この作品の直後に、同じように戦争を扱い、この作品よりずっと多くの読者を持つことになった長編小説『四世同堂』が出現したこともあり、この作品はいくらか影が薄くなってしまっているように思われる。

このようなこともあり、これまで、この作品を真正面から論じているものはほとんどないように思う。

今回、この『火葬』を取り上げ、この作品を

平成14年12月26日受理

* 総合教育センター・助教授

詳細に分析し、老舎は一体何を描き出し、それを描くことで何を主張しているのかを考え、この結果に基づき、筆者なりに、作品のどのような部分の、どのような点に問題があるのか、或いはそうではないのではないかと、といった点までを明らかにしてみたい。さらに、老舎の全創作の流れから、この『火葬』が日中戦争以前の老舎の作品とどのように違うのか、或いは、老舎のこの作品での創作経験は、その直後の『四世同堂』にどのように生かされているのかといったことを考える手がかりとしたい^(註2)。

この作品『火葬』に掲載されている「序」を検討することから始めたい。

この「序」で、老舎は自ら「失敗作」と述べているのである。そもそもこれがこの作品を一般的に「失敗作」とする時の一つの根拠となっているようにと思われる。

まず、日中戦争勃発以後から1943年に『火葬』を書くまでの、老舎の当時の動向、さらには彼を取り巻く状況を簡単に振り返ってみよう。

周知のように、日中全面戦争は1937年7月7日、蘆溝橋事件の勃発を機に始まった。このため、この年の11月15日、老舎は家族と別れ、その時に住んでいた済南の齐鲁大学の宿舎を離れ、そのまま武漢に逃れる。武漢では、老舎は精力的に動いた。多くの参加者の中でも特に中心的な役割を果たし、文芸家の大同団結の組織でもある「全国文芸界抗敵協会」を設立させ、しかも、日中戦争全期間を通じ、総務部主任として粘り強くずっとこの会を維持し続けたことは有名である。

戦局はさらに緊迫の度を深めて行く。このため、1938年7月30日、老舎は武漢を離れ、長江上流の重慶へ居を移す。これ以後は重慶に住み続ける。そして、1942年夏になって、作品を書くために、一時、重慶から西北約50キロメートル離れている、嘉陵江に面した、北陪に移り住

む^(註3)。なお、この北陪には林語堂の別荘があり、老舎はそこに住んだのだという^(註4)。この地で、『火葬』は執筆されたのである。この年の『火葬』創作に伴う老舎を取り巻く事情は、以下の「『火葬』序」の記述に窺うことができる。

去年(1942年…筆者)の夏、北陪に来て、中篇小説を書こうと決めた。その理由は、(一)重慶は猛烈に暑くて、帰る気がしなかった。北陪もまた暑いけれど、重慶よりは静かだった。だから北陪にとどまり書くことに決めた。(二)抗戦中しばしば脚本を書いたが、様にならず、友人たちが脚本を捨て、小説に戻るよう勧めた。(三)傷痍軍人蕭君もまた北陪に勤務していて軍事に関わることを随時聞けたからである。/猛烈に暑く、五時に起きて、八時まで執筆して、その時間で止め、毎日千余字得ることができた。もともと中篇のつもりだったが、五、六万字になり、終わるのが難しくなってきたので、長篇に変更した。9月末、八万余字を得、10月10日にひとまず完結し、重慶に帰ることに決めた。ところが、10月10日入院し、盲腸の手術をしたことで、一切が中断してしまった。20日退院はしたが、依然として静養しなければならなかった。その頃ちょうど家族が北平から宝鶏へ到着、心は焦るが体は動かず、それで心はますます焦った。友人の多方面にわたる協力、援助で、家族は11月中旬北陪に到着した。23日から少しずつ補筆した。傷口は回復したが、腹痛が起こり、一日に或いは僅かに三、五百字にしかならないこともあった。それでも12月11日には全編を書き終えた。約十一万字、これが『火葬』である^(註5)。

このようにしてできあがった作品について、老舎自身が、どのように発言しているのかを、以下さらに続けて「序」によって確かめておきたい。ここが問題の個所である。

書き終わって、最初から一度読み返してみ
て、自ら判断を下した。良くない！この本を
失敗させた原因は幾つかあるだろう。(1) 五
年余り長篇を書かなかったので、筆を取れば
恐怖心が起こり、恐れれば恐れるほど、ます
ます慌ててしまい、自信を失うに至ってし
まった。(2) 天気が猛烈に暑く、また多病で
痛みもあり、無理に強制して自分を機械化し
なければ、書き続けられなかった。しかし、身
も心も機械化してしまって、良い作品を描き
出すことができるだろうか？私は敢えて言う
まい。…(略)…(3) 物語の場所の背景は文
城である。文城は地図で探し出すことのでき
ない場所で、つまり、それは決して存在しな
いものであり、私の心の中から捻り出したも
のである。私は敵に占領された都市を書きた
かったのだが、しかし抗戦の数年、私は決し
てどのような陥落した場所にも住んだことは
ない。出鱈目を言うしかなかった。このよ
うにすることで、私の「場所」は読者にその
味だけでも嗅がせることのできる真実を失っ
てしまった。私は文城を書いたが、書き終わっ
てもう一度見ると、私自身さえもそれが分か
らなかった。この方法は良くない！^(注6)

これから明らかなように、老舎自身は「良
くない」と言っているが、作品の内容に踏み
込み、どの部分が失敗したのか、或いはどこに
不満なのかについて具体的且つ詳細に述べてい
る訳ではないのである。

また、失敗として挙げている三つの原因であ
るが、(1)も(2)も、確かに作品の出来に影響
することは言うまでもないが、しかし、よくよく
考えると、たとえ(1)(2)の事情があったとし
ても、必ずしも作品が「失敗」するというこ
とにはならないのではないか。やや極端な言い
方をすれば、このような創作の時の事情が作品
成立の背後にあったとしても、これらは本当は
すでに出来上がった作品そのものとは何の関係
のないのである。だから、この部分は受け取り

方によっては、単なる言い訳、環境に対する不
満ふうなものとして理解することもできるので
はないか^(注7)。

さらにまた、これらのうち(3)は確かにに作
品の内容に関わっている部分である。ただし、な
ぜ架空の都市では駄目なのかの説明がいくらか
不足していないだろうか。例えば、世界には、架
空の都市を舞台とし、りっぱに成功している作
品だってあるのだから、ただ実在の都市ではな
いので「真実」味がないとか、「街のにおいがな
い」とかいうことだけでは、まだ作品は「駄目
なのだ」ということが十分説明されたことにな
らないだろう。

作品が「失敗作」であるかどうかは、本来、作
品の内容、構成、主題、作者の主張がどのよう
かといった部分を明らかにし、この部分を詳細
に検討した上で判断すべきものであると考えら
れる。ところが、この「序」では必ずしもそれ
が行われているわけではないのである。とはい
え、もちろん、これはあくまで作品の「序」で
あるので、作者がそこまで分析し読者に示す義
務はない。にもかかわらず、ここで敢えて「序」
を提示し、その内容を検討したのは、「序」では
本当は「失敗作」とする決定的な理由を提示し
ていないということを、どうしても一度確認し
ておく必要があったからである。

この点からも、今回の、この小論で行う検討
のようなものが、老舎の作品の正当な評価を行
う上でも、その時期の老舎の主張や創作傾向を
掴む上でも必要であることが分かるのではない
か。

二

これから、作者の創作意図、作品全体の構成
を検討して行くのであるが、まず、最初に、こ
の作品における作者の狙いを述べておきたい。

ごく簡単に言えば、老舎自身が「序」にも書
いているように「戦争」を描くことである。た

だ、「戦争」といっても様々な部分がある。この作品の場合、特に、戦争に直面している中国人の考え方や態度というものは如何にあるべきか、ということの問題にしていると思われる。だから、この作品での作者の腕の見せどころは、占領下で生活する、いろんな型の中国人を書き分け、そしてある人物には嫌悪、憤慨させ、ある人物には同情、共感させ、涙を流させ、最終的には、誰もが納得する、進むべき道を読者に暗示できるかどうかというところにあるのである。

この作品は日中戦争時の物語であるので、作品世界全体を覆っている「善」と「悪」の基準ははっきりしている。日本軍、或いは日本軍に協力する者、日本軍が有利になってしまうような行動はすべて「悪」である。また逆に日本軍、或いは日本軍に協力する者を攻撃したり、殺害したりする者は「善」ということになる。だから、この物語に登場する日本人は、「悪」の象徴であり、動物から人間まですべて殺しまくり、高価なものは略奪し尽くし、若い女性と見れば手当たり次第に強姦するといった、極めて凶悪、残虐で、ほぼ獣同然の人種として描かれている。

夜、彼らは（文城市民…筆者）敵の狂ったような笑いと大声での歌を聞きながら、彼らの歯は自分の唇を噛み破った。一声鋭い叫び声が上がった。彼等は野獣が隣の若い女性か或いは一七、八歳の娘を捕らえたということを知った。/何でも我慢できるが、この汚辱だけは我慢できなかった。男達は門の後ろや塀の角に身を潜め、棍棒や短刀で迎え撃ち、汚辱を消滅しようとし始めた。女達は逃げても逃げおおせることができないばかりか、隠れても隠れきれず、自分がどうして女に生まれたのかと恨んだ。女はすでに自分を守ることができないばかりか、父兄や夫に累が及んでしまう！彼女たちは号泣し、涙を枯れるまで流し尽くし、彼女たちのある者は死を待ち、ある者は腰帯やハサミで自分の命を絶った。彼

女たちの死は、男の怒りと憎しみを激発させた。棍棒と短刀が野獣の上に加えられ、その後で自殺した。/野獣の命は人の命よりもずっと値が高かった。一人の野獣の死は、八人ないし十人の命で償わされた。一軒、一軒の乳飲み子たちまで、すべて一人の野獣のために殉死させられた。殉死の前には、男女の区別なく、最大の汚辱、最も複雑な残酷な刑を受けた。男女の汗、血、呻き、狂ったような叫び、呪詛、生死の間のうわごとが、野獣たちに少しばかりの満足、快楽を与えた。文城は暗黒の牢獄に変わった。^(注8)

この大きな「善」と「悪」の基準に従い、占領下の文城市民のタイプは、日本軍に対する態度から、おおよそ三つのグループに分けることができると思われる。

- (1) 日本軍に占領された後、日本軍の統治に積極的に協力する。所謂「走狗」といわれる人々である。彼らは文城を占領している日本軍の力にすり寄り、その権力を寧ろ積極的に自分たちの便宜のために利用する。この結果、日本軍の占領下では、占領され搾取される人々を尻目に、日本軍の援助を受け、最も羽振りの良い生活をする事ができる。もちろん文城の住民には激しく恨まれているが、日本軍に守られ容易には手を出せない。この作品では、劉二狗という人物がまさにそうである。
- (2) ここに属する人物は、基本的には「どっちつかず」の人々である。このグループの人は、どちらかといえば、基本的には日本軍を好きではなく、積極的に日本人に協力する気持ちはない。だが、その「どっちつかず」の態度が、結果的には却って日本軍に利用され、人々からは日本軍に協力したと見なされることになる人もいる。ここに入るのが、王拳人である。逆にしだいに目覚め抗戦の態度を身に着けてゆく人もいる。ここに入る人物が、王拳人の娘夢蓮である。
- (3) (1) とは正反対のグループである。日本軍

には真っ向から抵抗し、どうにかして日本軍を壊滅しようと試みる。したがって、彼等の行動はいつも命がけである。この色彩が最も強いのは中国軍の、所謂英雄たちである。これらの人物は、最終的には、日本軍との抗戦の中で勇敢に戦い、笑って死んでいく。唐連隊長や、占領下の文城に潜入する私服部隊の石隊長、その配下の人々などが、ここに入る。

このように、この作品には比較的わかり易い人物配置がなされている。

この大枠の中で、考えや態度が変化して行くのが(2)に属する人物たちである。人は戦争という極限の事態に遭遇するならば、否が応でもその局面に応じて、平和なときの自分の考え方や態度を全く変えざるを得ない。この変化の過程について、この作品中で最も詳細に書かれている人物が夢蓮という女性である。

この夢蓮の対極にいる人物として描かれているのが彼女の父親の王挙人である。王挙人は、最初は(2)に属していながら、しだいに(1)のグループの手伝いをさせられ、不幸な「悪」の境遇へと落ちていってしまうのである。

このように、彼らのうち、一方の夢蓮はいわば「善」の方向へとしだいに進んで行き、他方の王挙人は「悪」の方向へとしだいに落ち込んで行くことになるのであれば、この二人の方向を分ける決定的なものは一体何なのか、この部分を明らかにすれば、作者の創作意図がもっとはっきりするのではないか。

三

さて王挙人であるが、王挙人は、「挙人」ということから、すぐに清の時代において「科挙」の試験に受かった人物であることがわかる。嘗ての「科挙」の合格者のほとんどがそうであったように、王挙人も官職にも就いただろうし、その土地の有力者でもあるはずである。また、この作品では、王挙人の家族はもともと四、五人子供がいたが、すべて亡くなってしまい、今は

娘が一人いるだけで、妻も亡くなって今はいない、ということになっている。この王挙人の娘が夢蓮なのである。

まず、この作品の冒頭では、王挙人は好ましい人物として登場することに注目したい。

王挙人は、この作品の冒頭に夢蓮の「一番好きなのは鄭老人で、次が父親だけれど、彼女は父親をとっても愛していた」^(注9)という言葉で出てくる。鄭老人というのは王挙人の小作人で、小さい頃から夢蓮を可愛がっていた。この老人は別格である。だから、父親も大好きなのである。

だから、もし平和な時代であれば、父と娘はこのままお互いに愛し合って、経済的にも何不自由ない生活を送り、やがて娘は愛する男性と結婚し、父親は静かに死んでゆくはずであった。ところが、日本との戦争が起こってしまった。このことで、父と娘の生活や、さらには親と娘の関係まで一変してしまうのである。

次に王挙人が登場するのは、日本軍が文城に進攻してきた時の戦いに関わる場面である。ここに来て、王挙人に対する人々の見方が少し変わってくる。文城に進攻する日本人との戦いで中国軍が奮戦しているのを見て、一般の人が興奮し、中国軍に協力するなかで、王挙人は以下のようなものとして描かれている。

王挙人は少しも興奮しなかった。これに反して、とても悲観的だった。彼は最も信頼する人以外には、軽々しく意見を発表することにはなかったが、彼の顔色、彼の故意の沈黙、彼が余り家を出ないといったことが抗戦に対して信頼していない表示であるということは、誰も見出していた^(注10)。

この、日本軍との戦いに悲観的で、協力に積極的でないのである。この王挙人の態度がやがて人々の疑惑を呼ぶ。彼が「漢奸（敵に通じる者、売国奴）」ではないかといううわさが流れるのである。だが、この事実を直接会って確かめ

ようとやってきた人物に向かって、娘の夢蓮は「私の父は人に申し訳ないようなことするはずはありません!」ときっぱり言い切る。

また、王挙人の容貌であるが、以下のように描かれている。

「清癯（やせている）」は王挙人がよく自分を形容するのに持ち出してくる二文字だった。中くらいの身長、小さな痩せた顔、王挙人は見て恐怖心を起こさせるような威厳は全くなかった。全身は、十分固くない骨を除いて、皺のついた柔らかい皮膚だった。どんなに自分をいとおしんだとしても、自分の身体の骨と柔らかい皮膚を撫でるに至れば、ひどく失望を感じることになる。だから、彼は朝から晩まで自分の髭をいつも撫でていた。巧い具合に彼の手をちょっと置ける場所をあらしめたのである。だが、彼の髭はけっしてかっこよくなかった。^(注11)

どちらかといえば貧相と言える。この王挙人の容貌からも、腹黒くて、悪いことを企むような人物ではないという印象は生まれると思う。

このいくつかの冒頭の表現や彼の容貌から、最初の段階では、王挙人の性格や思考や態度はいくらか誤解されるところはあるが、王挙人は決して根の部分から「悪い人物」ではないとして描き出されていると考えることができる^(注12)。

この王挙人の考え方や態度は、これまでそれほど大きな問題にならなかった。だが、占領下ではどうなのか。

文城が陥落してから、…（略）… 挙人公は驚いたことに敵の命令を受けて維持会会長になってしまったのだ。彼女にとって最も耐え難かったのは、挙人公が彼女に向かって、家のため、土地のため、衣食のため、私には他に方法がなかったのだ! さらに、お前、夢蓮のため——投降しないわけにはいかなかった、と声明したことである。^(注13)

文城陥落後、この王挙人は衝撃的な行動に出る。にわかに日本軍への協力を始めるのである。なぜ王挙人のような人物がこのような行動を選択してしまったのか。

それは自分の「家、土地、衣食、そして、娘のため」であるということなのである。

こうであれば、この王挙人の理由をどのように考えたらいのだろうか。

このことを検討する前に、先に、維持会会長を引き受けたことで、王挙人はどのような運命を辿り、実際にどのようなことを引き起こすことになるのか、この点を見してみる。

彼は思った、敵が彼に出馬を願うのは、彼を利用しただけにすぎない。彼は決して何らかの実権を得ることを望んではいなかった。彼は自分がすでに老いており、精神、体力とも一人で「公務」をすることに耐えられないことを知っていた。だが、彼は——結局、挙人公であることに自惚れがないこともなかった。もしこの挙人という名がなければ、彼はこの争乱の時期に、何で自分や自分の財産を守るというのだ? もし彼が挙人公でなかったならば、敵は適当に街の野良犬のように殺してしまうだろう。彼の小さな瞳は笑いを含んだ光を発していた。同時に、彼は思った、敵はただ彼の名望を利用しただけだから、彼を邪魔しに来ることはないだろう、部屋の中に座って、『東萊博議』をちょっと読んで、幾袋かの煙草を吸い、余年を過ごし、生命と、家族、財産と『東萊博議』を保てたら、十分である、と^(注14)。

王挙人は「挙人」という名前が「自分や自分の財産」を守る武器であると知っている。日本軍は彼の「挙人」という名前を利用したがっている。だから、王挙人自身はその「挙人」を貸してやることで、「自分や自分の財産」が守れるのであれば、そうしよう、その後は何も干渉されずゆっくり本でも読んで過ごすことができる

だろうと考えていたのである。
だが、彼の思惑は外れた。

たとえ彼に意見があったとしても、これまで発表したことはなかった。まず日本人が一切のことを先にしっかり相談してやって来た。彼は彼らがどのように相談したのか全く知らなかった。しかし、彼らは彼に意見を發表させた。彼が何も言うことができなければ、彼らはずっと待っていた。最後に、彼が小さい瘦せた頭を縦に振って、続けて「よろしい！よろしい！」と言ったならば、彼らは彼に署名をさせ、印鑑をつかせた。むしろまるで彼らが相談してきたことを、彼が喜んで実行しているみたいだった。だが、結果がどんなだということは、彼がすべて責任を負わなければならなかった。彼はいい加減に済まそうと思った。だが、彼らはどうしても彼に責任を負わせる。彼の深い溝のついた額には、玉の汗が浮かんた。^(註15)

ただ単に署名をし、印鑑を押すだけという具合に、徹底的に無責任でありたいのである。だが、無責任でありたいと思っても、どうしてもこの認可手続きに意思表示を求められる。そこに責任が発生する。これも王挙人にはひどく苦痛なのである。

彼が署名をし、印鑑を押した公文書、或いは公文書内のやるべき事情に問題が発生することがあったら、日本人は公文書を彼の顔になげつけ、どうにかして間違いを正すように命令した。日本人は彼の酒を飲んだり、食事をしたりするときには、あんなに喜び、遠慮深い、そんな彼らが公文書を彼の顔に投げつけ、全くそっぽを向いて相手にしないなどとは全く想像もしなかった。両手を膝の上に置き、頭を下げて、彼の涙は一行一行と下に流れた。^(註16)

このようないくつかの苦痛から、王挙人はこの仕事を辞めたいと思い始める。

彼は後悔した。しかし抜け出すことはできなかった、田地、家屋のため、彼は、どのように侮辱を受けようとも、日本人とのらりくらりとごまかして過ごさねばならなかった。彼は知っていた、もし彼がどうしても辞職をすると言うならば、日本人はすぐに彼の全部の財産を没収し、一枚のズボンも彼のために残しはしないだろうということ、を。^(註17)

自分から辞めることができないのであれば、相手に辞めさせるようにし向けたらたらどうか。

「そのうち、待っていれば、彼らが私を免職することになる、そうすれば良いのだ！彼は独り言を言った、「彼らが私を免職するのであるから、おそらく私の財産を没収するのは具合が悪いだろう？」と。/しかし、日本人は少しも彼を免職にする意志はなかった。日本人はまるでもっぱら平凡で能力のない人物を用いるのが好きみたいだった。彼はまるで自分の身体が井戸の中にいるみたいだった。手を離せば、井戸の中に落ち、手を離さなければ、手の筋力は疲れ尽きてしまう。彼はただ「助けてくれ！」と叫ぶしかなかった。^(註18)

自分から辞めれば財産は没収されるだろう。それは駄目だ。だとすれば、いい加減に仕事をすれば良い、そうすれば、きっと日本人の方から彼を免職させるに違いないと考えた。この場合、相手の都合で免職にするのだから、おそらく財産没収ということはないだろう。だがしかし、その思惑も外れる。それでも辞めさせられないのである。

どうしようとも、「自分自身や財産を守る」という気持ちがある以上、王挙人は維持委員会の会長を辞められないのである。

自分が維持会の会長を引き受けたのは、単に自分の「家、土地、衣食、そして、娘のため」であり、ただそれだけが守られれば良かったのだ。他には何の要求もなかった。まして、権力や利益に対する欲望は全くない。にもかかわらず、王拳人は職を引き受けたことで、実際には同胞を苦しめ、圧迫し、果ては同胞の殺害にまで手を貸すことになってしまうのである。

だとすれば、王拳人の自分が「家、土地、衣食、そして、娘のため」という考え方をしたからこそこういうことになったのであれば、この考えを止めれば良いのではないか。だが、このことを王拳人はどうしてもしないのである。

しかし、よく考えればこの「家、土地、衣食、そして、娘のため」そのものを否定するのは決して簡単ではない。実際、ある人が自分の「家、土地、衣食、そして娘」守るという理由で行った行動を、他人は否定できるはずはない。この部分は所謂「衣、食、住、子ども」であり、いうまでもなく人間にとって、極めて大事な部分であるからである。これを守る気持ちは、おそらく、人間誰にもあるものであろう。

確かにこの部分は否定しにくい。だが、戦争ということになれば、また別なのである。

一つは、王拳人の場合のように、自分の「家、土地、衣食、そして、娘のため」という部分に、他人などどうでも良いから自分だけはという利己的な欲が入り込んで来る時である。中国のすべての人が、それぞれ自分の「家、土地、衣食、そして、娘のため」という理由で行動すれば、少なくとも一致団結して敵に当たるということはできないことになるだろう。

もう一つは、王拳人の場合、「拳人」を貸すことで、「家、土地、衣食、そして、娘」を守ろうとしたのであるが、この行為は日本軍に「家、土地、衣食、そして、娘」を守ってもらうということであり、このように日本軍と取引に及んだということである。ここに大きな問題があったのである。

この点を考えるために、王拳人の最後の場面

を見てみることにする。

のちに、王拳人は監獄に入れられる。中国軍の関係者と接触したことで、阿片中毒の田麻子に憲兵に密告されたのである。たいした取り調べもなく、すぐ監獄に引っ張ってゆかれる。

この場面の、投獄された時の、王拳人の日本人に対する捉え方の変化を見てみよう。

彼自身はこのような虐待を受けたことはなかった。だから彼はずっと他の人の苦痛に関心がなかった。もし彼自身がこの地に閉じこめられたのでなかったなら、彼は決して日本人がこんなに野蛮で、無情で、残忍であり、彼の同胞たちがこのような地獄の残酷な刑罰を受け、苦しみをなめているなどとは想像もしなかっただろう。彼が入獄する以前には、みんなが惨めに刑罰を受けるのは、みんな禍を自分から選び取っているのだと彼は思っていた。もしみんなが情勢を見ながら行動し、至るところで従順ならば、日本人だって理由もなくみんなを苦しめるはずはない、みんなが苦しい目に遭うのは、みんなが無知だからであり、日本人は決してオオカミ、山犬ではないのだと彼は考えていた。だが、現在、彼は日本人の本当の顔を知った。^(註19)

今、文城にいる日本軍は、まさしく人間ではなく、獣のように「野蛮で、無情で、残忍」なのであり、彼等は中国人の「家、土地、衣食、娘を守る」ことをいつでも放棄するのである。良い例が、作品で暗示されているように、王拳人自身も獄につながれ、日本軍によって命は奪われようとしているのである。このことに、王拳人だけはまるで気づかず、釈放されることに望みを持っているのである。

ともかく、日本軍に「自分の家、土地、衣食、娘」を守ってもらえるという判断は幻想でしかなく、最初からそれを放棄すると結果は同じだった。日本軍が文城に存在している限り、「自分の家、土地、衣食、娘を守る」ことはどうし

でも不可能なのである。

だが、彼は死ぬまで態度を変えることはなかった。

「私は人の機嫌を損なうようなことはしない。誰の機嫌を損なわないことによって、私の老いぼれ命を安全に保つことができるからだ。私はただ老いぼれ命を守りたいだけであって、決して権力や利益が欲しいのではない！」^(註 20)

この態度を取ることでしか自分の命が守られないと信じ続けたのである。

四

王挙人と対照的に描かれているのが娘の夢蓮である。

これからこの夢蓮を考えていくのだが、特に、主に作者が夢蓮をどのように描いているのか、この人物を通じて読者にどのようなメッセージを送っているのかに注目して考えて行くことにする。

また、夢蓮の態度や性格も王挙人と対比させて考えることで、さらに明らかになってくると思われるので、いくらか二人を対比させる形も取りたい。

王挙人が戦争と関わり合いなることを避けようとしていたのに対して、娘の、夢蓮は戦争に直面し、平和な時の自分の態度や考え方を変えなければならないと感じている。この点について、夢蓮が実際に戦っている場面を見ながら考えてみよう。以下夢蓮の戦いの場面である。

ただ、戦いといっても、実際に日本人と戦うのではなく、日本軍の手足となって働く劉二狗との戦いである。だが、劉二狗との戦いは、劉二狗がすでに日本の「犬」であるので、まさに日本軍との戦いでもあると考えて良からう。

劉二狗は前々から夢蓮が好きだった。しかし、どうしても夢蓮は自分を好きになってはくれな

かった。やがて、文城が日本軍に占領され、劉二狗は日本軍から思わぬ権力を与えられることになる。これを良いことに、夢蓮を力づくでも自分のものにしようとする。だが、このような劉二狗に対して、夢蓮は一步も引かない。

ただ勇敢でありさえすれば、彼女自身を守ることができる。たとえ前に日本の野獣がいたとしても、彼女は向かって行こうと決心していた。これはあらゆる女性が少なくとも実行しなければならないことであった。^(註 21)

夢蓮は怯えて逃げることをしない。敵に向かって行くのである。夢蓮を執拗に追い回す劉二狗に向かって、夢蓮はとうとうテーブルの上にあった茶碗を投げて抵抗する。このため劉二狗は傷を負い、その場から逃げ去ってしまう。

一方、王挙人は夢蓮が劉二狗に茶碗を投げつけ傷を負わせたと聞いて、以下のような反応をする。

王挙人はしかし驚き慌てた。彼は血を最も恐れていた。ナンキンムシ、蚊、ハエ、彼は相当な胆力を使って殺した。蜘蛛、サソリ、蜂に対しては、敬してこれを遠ざけた。確実に彼や、或いは他の人に血を流させるのに十分であるもの、例えば、虎やオオカミ、毒蛇や日本人のようなものに対しては、彼はただどうかご容赦下さいとするだけで、絶対に敢えて触れるようなことをしなかった。たとえそれらが理由もなく彼に危害を与えたとしても、彼はただ首をうなだれて死を受け、死んでも怨むことはないとするより仕方がなかった。/夢蓮のためというより、自分の安全のために、挙人公は一方では人に雲南の白薬と贈り物を持たせて二狗をなだめ、一方では自ら夢蓮の処を訪ねた。^(註 22)

王挙人は劉二狗を怒らせないように、ひいては日本軍を怒らせないようにする。たとえ相手

が怒ったとしても、その場をできる限り丸く収めるようあらゆる手段を使うのである。この態度は戦わず、血も流さず、「自分の安全」を守れるというところにも特徴がある。

劉二狗はこれで引き下がったわけではない。夢蓮に仕返しをする。日本軍人たちとの宴席に夢蓮を引っ張り出し、日本軍人の酒の相手を勤めさせようとする。その場に引き出されたならば、おそらく夢蓮もただでは済まないことになるはずである。

「あなたどうぞどしどし日本人を招待しなさい、私、きっと彼等にお仕えするわよ！拳銃はないけど、少なくとも小さなナイフはあるし、ハサミだってあるわ。私は彼等を一人ぐらい刺し殺すことはできるわ、見てなさい！たとえナイフやハサミがなくとも、私には歯もあるし、手もあるわ！私が彼等を殺せば、私は死ぬわ。でもそうなればあなただって生きてはいられないわよ。あなたが主人で、彼等を招待して、それで殺されるようなことになるんですからね！わかるでしょう？」^(註23)

この態度は明らかにすでに平和なときの夢蓮の態度とはまるで違う。平和なときには、このようなことを考えることもなかっただろうし、言うことだってできなかっただろう。だが、今や、「私は死ぬわ」という言葉がみえるように、すでに夢蓮は「死」をもってしても抵抗する時まで決心をしているのである。

この夢蓮の発言に、王拳人は以下のように反応する。

王拳人は手の指で耳をふさごうと強く思った。この時彼はほとんど夢蓮を恨んでいた。彼は心の中で「私はこんなに修養があるのに、どうしてこんな乱暴な娘ができたのだろう？私の老いた命は、彼女の手で絶ち切られるに違いない。全く恨めしい！」^(註24)

王拳人は争うことを好まない。逆に夢蓮は徹底的に戦おうとしている。戦って死んでも構わないとさえ思っている。これを王拳人は夢蓮が「乱暴」で「修養」がないからだ考えているのである。

夢蓮の言葉に、夢蓮を招待することの不可能を思い知り、劉二狗は持ってきた招待状を取り上げ、ポケットに突っ込んで帰ろうとする。それに向かって、夢蓮のさらに発する言葉である。

「二狗！待ちなさい！夢蓮は彼に命令した。「あなたにはっきり言うておきます。今後、あなたが二度と私をどうこうしようとするのを許さないわよ。いいですか。私は豚に嫁ぐことはあっても、あなたに嫁ぐことはありません。あなたは日本人を恐れているでしょうが、私は日本人を憎んでいます！出て行きなさい！」^(註25)

作品の中で劉二狗と夢蓮の戦いは何度か繰り返され、戦いのレベルもしだいに過激なものとなって行く。だが、夢蓮の戦う態度は一貫して変わることはないのである。

この幾つかの場面ですでに分かるように、夢蓮の場合は、戦争という状況の中で、すでに平和な時代の考え方や態度とは全く違っているのである。この戦争の中で生きて行くためには「死」を賭けてでも戦うという考え方や態度に到達している。「死」を恐れては、日本軍と戦えないのである。

王拳人の場合は、すでに見たように、あくまで相手と衝突しないことで「自分の命」を守って行こうとする態度である。だから、もし衝突が起こりそうになったら、あらゆる策を用いてそれを丸く収めようとする。血を流して戦うなどという気は全くないのである。

王拳人は戦わない。夢蓮は戦う。戦えばおそらく血を流したり、相手を殺し、自分も死んだりすることが起こりうる。夢蓮は、自分は死んでも良いと思うようになっている。王拳人はど

うしても「死」を受け入れることができない。この点が二人の運命の分かれ目になったのである。

「私の命はそれほど重要なものなのか？」そうなのだ。彼女は、命は実際に大切なものであると知っていた。…（略）…彼女は死を見た。様々な死は、悪夢よりもっと醜い死だった。彼女は死を知った。彼女はこの年月に死んだとしても少しも不思議ではなかった、人は逃れられないと感じた。この点がはっきり分かってから、彼女はいつも死を考えた、死ぬ勇気のない者は、戦争に生きる資格がないみたいだった。戦争はもともと死の中に生を求めるものなのである。彼女の思想は、以前は軽佻浮薄だったが、現在は戦争によって鍛えられて生命のようにとても大きく、とても重くなった。彼女は死をいつも考えないわけにはいかなかった。なぜなら災難、武器が目の前にあるのだから（註26）

戦争という時代には「死」から逃げ回るのはなく、寧ろ「死」を受け入れることで、恐怖がなくなり、逆に敵に向かって行くことができ、この結果、却って生き抜くことができるということである。

このような夢蓮の考え方や態度から作者の主張はどのようなものであるかが理解できる。

この作品で「死」ということが問題になっていることは、他の場面でも「死」がしばしば語られていることから理解できる。例えば、「石隊長の配下はただ五人だけ残り、後のものは全部笑って文城に死んでいった」（註27）とか、私服部隊の隊長が戦死をする場面でも、「敵は必ず消滅しなければならないし、彼自身も必ず犠牲にならないといけない」（註28）や、最後の煙に巻かれて「息苦しさを感じたが、心の中は寧ろ平和だった」（註29）等の「死」の描写がある。その幾つかの、英雄たちの「死」は勇敢で、明るい。どの人物も「死」を恐れないしまるで、むしろ「死」を

望んでいるようにさえ描き出されている。

作者の主張が「戦う」であるので、当然戦えば必ず一方が死に、一方が生き残るということが起こりうるわけで、この際にはやはり「死」ということに、どうしても決着をつけないければならない。そして、その決着のつけ方も、「戦う」であるから、「死」が恐ろしいものであってはならないのである。

五

この作品で、考えておかねばならない問題がもう一つある。これを考えるに当たり、まず、これと関連する王拳人の最後の言葉を読んでみる。

彼は囚人たちがみな日本兵にやられ、日本兵が一人も失われないことを望んだ。もし日本兵が失われることになったら、彼等は十倍百倍も償いを要求するだろうことを彼は知っていた。おそらくこれによって彼自身も連座しなければならなくなるだろう。彼はこれらの囚人たちが身の程を知らないのを恨んだ。「もうやめろ、もうやめろ！日本人は都市住民を皆殺しにするぞ！馬鹿者もの達が！」彼は体を震わせ、力の限り叫んだ。可哀想に！彼の声は余りにも小さくて、聞き取れる人はいなかった。（註30）

王拳人は最後の最後まで日本軍と戦う意志は示さなかった。その戦わないとする理由の一つに日本兵による「報復」があったのである。

ここで考えておきたいのは、この報復に対する恐怖を如何に越えればいいのかということである。日本兵が一人失われれば、報復としてその十倍百倍を殺すというのである。このような表現はあちこちに見える。もしこの報復が恐ろしいのであれば、行動を起こすことはできない。

報復に対する恐怖は、決して自分だけの問題ではなく、全く関係のない中国人の老若男女に

至るまでの、他人までが犠牲になる可能性があるところに引き起こされる。自分の命だけではなく、他人の命も関わってくるのである。

だが、善し悪しの問題は別にして、戦争ということになれば、泥沼のように、どちらかが、どちらかを報復するということは必ず起こりうるし、しかもそれも一二回にとどまることはないだろう。

ただ、このような報復が数回繰り返されれば、占領下の住民は、このような獣のような日本兵であれば、報復されようが、されまいが、いずれ自分たちが皆殺しされるのは時間の問題なのであると考えるようになってと思われる。どのようにしていても、いずれ自分の命も、周りの他人の命も奪われるのであるならば、たとえ一人でも日本兵の命を奪った方がましだと考えるようになるのではないか。こう考える人々は、日本軍の占領が長くなればなるほど、次第に増えて行くのは、十分想像できる。

この点に関しては、作者が文城住民の態度の変化を述べている、以下のような文章があり、これを作者の考える、住民が報復を克服する一つの例としたい。

文城の人々は恥辱、困窮、飢餓の中で、自分たちの前途がただ死だけであるということを知り始めた。/この時になってはじめて、彼等は「恨み」というものがわかった。恨みは、適当な場所、時期にあつては、崇高なものである。なぜならそれは人に絶望の中から、振り向いて活路を見出させ、「観念して死に就く」を「幾重もの囲みを突き破る」に変え、恐怖を憤怒に変え、水を火に変えることができるからである。/恨みを持ったことで、彼等のある者は結果がどうであれ街から逃げ出し軍隊に入った、ある者は頭を落とされるか、それとも、手足を切り落としてその後で殺されるかにかまわず、まずいきなり敵の頭を勝ち割った、ある者は命を投げ出して武器を満載している列車に火をつけに行った、ある者は

井戸に毒薬を入れたのである。残念なことに、彼等は火薬を手に入れることができなかった。もし使うのに十分な爆弾があれば、彼等は必ず鉄道の鉄橋を爆破しただろうし、敵の兵舎を爆破しただろう。…(略)…敵が彼等に与える懲罰は極めて重いものであることはわかっていたが、彼等の子どもでさえも知っていた、ただ犠牲だけが希望を得ることのできるものである、と。犠牲は、犠牲であるからして、得失を計算することができない。犠牲は算盤玉の上のことではないのである^(註31)。

いずれにしろ、文民住民の日本兵の殺害、それに対する日本兵の報復といった悲惨な繰り返しになる。だが、残虐で非道な人々が他の人々の土地を侵略して、さらにその人々を報復という形で押さえつけようとしても、決して押さえ込めるはずはないのである。

六

この小論では、王挙人と夢蓮の動向を手がかりとして、この作品を考えてきた。この結果、この作品は日本軍と「戦う」態度と「戦わない」態度の対決であったということもできるし、或いは「戦うことを促す」作品であったと考えることもできる。つまり、作品の展開でいえば、「戦う」が「戦わない」を論破し、最終的には「戦う」が勝利するという流れになっているといえるだろう。

この作品で、「戦わない」を代表するのは王挙人であり、「戦う」側は夢蓮ということになるだろう。

だが、この作品では、王挙人は決して徹頭徹尾、極悪非道の人物に描かれているわけではない。むしろ個人的には良い人間なのである。ここに老舎の大きな特徴がある^(註32)。性格的にいえば悪い人間ではないのだけれど、ただ、戦争に直面し、武器を取って「戦わない」で、「家、

土地、衣服、肉親」を守っていこうとするとこ
ろにだけ問題があるのである。

このことを踏まえて、よくよく考えれば、た
とえ戦いがあっても、人間は誰しもし「戦
わない」でどうにかその場を切り抜けることが
できるならば、そうしたいと思うのではないか。
また、誰しも「家、土地、衣服、肉親」を捨て
たくはないし、死にたくはないのである。「戦う」
となれば、自分の家も土地も没収され、衣服も
なくなり、敵の血も流し、自分の血も、肉親の
流れ、敵も死に、自分たちも死ぬこともあるだ
ろう。また、敵を殺せば報復だってある。だから、
敵がやって来た時に、確かに敵は憎いが、それ
でも無理に対決するのではなく、寧ろその人
の機嫌を取りながら、あたらずさわらず、危害
が及ばないようにして暮らして行きたいと思う
かもしれない。いや、却って、このような気持
ちを持つのが普通なのではないか。この作品の
王拳人は、このような気持ちの代弁者の役割を
担っているのである。

だから、この作品で最も難しいのは、作者が
どのようにストーリーを展開させれば、読者に
そのような「自然な」人間の「戦いたく」気持
ちを踏み越えて、むしろ苦痛が多いと思われる
「戦う」という決心をさせられるのか、というこ
ろである。

このためには、この王拳人の態度を代表とす
る、「戦わない」でどうにか切り抜けようとする
道の一つ一つ塞いでゆくしかないのである。こ
の方法として、作者は内側からと、外側からの
二つの手段を取っている。

内側からは日本軍の獣のような残虐、残忍性
を描き出すことである。そして王拳人をも殺し
てしまうことにする。王拳人さえこのようにな
ってしまうのだから、「戦う」しかないという
ふうにしてしまうのである。

また、外側からは、「戦わない」という人物の
態度を否定、軽蔑する、「戦う」人物を描いてみ
せるのである。ただ、この位置に、戦うことを
すでに当然としている英雄軍人を最初に置いて

も余り説得力がない。むしろ、もともと肉体的
にも、精神的にも弱々しい女性の方が良い。し
かも、この人物が、少しずつ目覚めて「戦う」方
向へ進んでいけば理想的であると考えているの
である。この人物が、いうまでもなく夢蓮なの
である。

さらに、「戦う」というところに進んでゆくに
は難問がある。戦えば必ず一方が死ぬことにな
ることを想定しなければならない。「死」は避け
て通れないのである。自分もそうだし、他人の
「死」も起こりうる。だとすれば、「戦う」には
どうしても「死」の問題を考え、「死」に対する
恐怖を克服させる必要がある。これもまた容易
ではない。この作品に様々な「死」についての
考え方、或いは様々な勇敢な「死」が描き出さ
れているのは、まさにこのためだったのである。

この結果、読者が、この作品のストーリーの
中を歩くことで「戦う」という気持ちになったの
であれば、この作品は成功したということにな
るし、そうでなければ失敗であったということに
なる。

おわりに

小論の冒頭で老舎自身はこの作品を「失敗作」
だとしていることはすでに述べたのだが、今回
の考察の結果に基づき、最後に、ここで、筆者
なりの、この作品の成否に関わる条件を挙げて、
終わりにしたい。このうちの一つでも十分でな
いときにはじめてこの作品を「失敗作」という
ことができるのではないか。

- (1) まず、日本軍を凶悪、残忍、極悪非道の野
獣の集団と描く必要がある。これが、作者が
王拳人を否定し、「戦う」と主張する際の、最
大の根拠になっているのだから。
- (2) 理想的な中国軍の英雄を描き出すことも
必要である。この人物たちが、読者の手本に
なるはずだからである。だが、英雄が余りに
格好良く、余りに潔くありすぎてはいけない。
読者が、英雄たちは自分たちとは全く違って

いるとか、彼等の考え方や行動が白々しいといったふうに感じてしまったならば、作品は成功しない。

- (3) 王拳人が読者に理解される必要がある。いきなり最初から王拳人を悪い人物という裁断を下されれば、作者の苦労も水の泡だし、この作品の存在意義も失われるように思う。
- (4) 作者のメッセージを伝えるために描き出されている登場人物が適当であるかどうかは重要なところである。この作品では、読者の手本となるのはもちろん中国の軍人の英雄達であるが、ただ、人は誰でもそこまで一気に到達することはできない。物語の中を読者と一緒に手本のところまで歩いて行く人物が必要である。この人物が夢蓮である。作者の工夫は、女性を、しかも体の小さい、ひ弱な女性を採用したという点である。「死ぬ覚悟」の境地に、むしろ夢蓮のような女性が到達したからこそ読者は感動するのである。ただ、この夢蓮であるが、彼女は王拳人の娘であるから、いわばお金持ちの家のお嬢さんである。このお嬢さんが、実際に、この作品のように、種々の戦争を体験することで、自分の命を捨てても、日本軍と戦っていかうとするようなことがあり得るだろうかという疑問や違和感を読者が持つならば、作品は成功しない。^(注 33)

なお、この作品については、今回の小論で十分に論じ尽くしたわけでない。例えば、今回は、王拳人と夢蓮に注目し、作品分析をしたが、その他にも、王拳人の小作人の鄭老人も併せて考える必要があるだろう。また、この作品では夢蓮と鄭老人以外の主要な登場人物は全部死ぬことになる。この部分にも考察を加えてない。後の課題としたい。(完)

注

この考察に当たり、テキストは『老舍全集小説3』

(人民文学出版社・1999)を使用した。したがって(注)で示すページはこの本のものである。他にも、この作品は『老舍文集第三巻』(人民文学出版社・1980)、『老舍小説全集第五巻』(長江文芸出版社・1994)でも見ることができる。日本語の翻訳としては『老舍小説全集7 火葬 私の一生』(学習研究社・1982)がある。

- (1) 芝垣芳太郎氏の、『老舍と日中戦争』(東方書店・1995・p.219)で述べる評価である。また、平松圭子氏『『火葬』について』(『老舍小説全集7 火葬 私の一生』(学習研究社・1982)の解説)での評価も基本的に芝垣氏と同じであるようにみえる。
- (2) また、このような『火葬』の位置づけも一般的である。例えば、平松圭子氏は「たしかに戦争は老舍の経験のわくをはみ出るもので、戦争の掘り下げは甘いかもしれない。だが、『火葬』を脱稿し、一年後に書き始めた『四世同堂』への足がかりとして、『火葬』がなんらかの形で『四世同堂』とかかわりを持っていなければならない。」と述べ具体的な例『火葬』と『四世同堂』から一つ挙げ、それを説明した後、「『火葬』を土台の一部にして、さらに発展させた部分があっても不思議ではなからう。この見方が可能であれば、『火葬』は作品の成功不成功とは別に、次の長篇の足がかりとして注目されてよいのではないか。」(同上の資料)という見方を示している。
- (3) この作品の「序」の日付からすれば1943年であるが、平松氏はその他の資料から考えて、1942年だとする。日付については「この序文の中で『去年夏…十二月十日完成』とあるため『火葬』の制作時期は従来一九四三年といわれてきた。しかし、近年中国で刊行された資料はいずれも一九四二年夏から制作にかかったとしている(老舍「八方風雨」蕭伯青「老舍在北倍」その他)。それで私も1942年を制作時期とみた。すると序文中の『去年夏云々』と矛盾を生じるが、活字になる際、前年に書いた序文の日付だけを改めたのではないだろうか」(同上の資料)。ただ、芝垣氏は(1)の資料ではこの点には触れていず、1943年のままである。ここでは依って資料も確かと思われるので、平松氏の見解に従った。
- (4) 平松圭子氏の同上資料、並びに日下恒夫「老舍年譜」(『老舍小説全集10 『四世同堂』(下)』)参照。
- (5) 『火葬』「序」pp.331-332
- (6) 『火葬』「序」p.332
- (7) 文学史などで「ユーモア作家」というふうに称されており、事実初期の作品は積極的に笑いを作品に取り込もうとしている。この『火葬』の「序」の内容と同じように、老舍の創作体験談である『老牛破車』等の文章にも同じ傾向が見ら

- れる。老舍は基本的には自分の作品を良く言わないのである。その内容を書いてあるままに受け取るべきかどうかは非常に難しい。ともあれ、作者の意見は意見としてきちんと聞きながら、最終的には実際に自分の目で読んで、判断するしかないと思われる。
- (8) 『火葬』 十三 pp. 406-407
 (9) 『火葬』 三 p. 346
 (10) 『火葬』 五 p. 359
 (11) 『火葬』 五 pp. 359-360
 (12) このような人物造形は初期の長篇小説にも見られるものである。このことは拙稿「老舍『老張の哲学』私論」（集刊東洋学第五十七号）拙稿「老舍『趙子曰』試論」（八戸工業大学紀要第9巻）等にも書いている。いわば老舍の「ユーモア」的筆法とでも言えるだろうか。「ユーモア」的筆致で描写される人物は決して悪い人物ではなく、何らかの原因で、その人物は酔生夢死の状態にあり、その社会の中で、最も活発に泳ぎ回り、他人を不幸に陥れている。そして、結末は、その人物が夢の状態から醒めればハッピーエンドであるが、それから醒めなければ、被害は永遠と続くことを暗示する。もちろんこの登場人物は作者の批判を受けている。この王挙人の描写は、この系列に属すると思う。
- (13) 『火葬』 十一 p. 393
 (14) 『火葬』 十四 p. 410
 (15) 『火葬』 十四 p. 411
 (16) 同上
 (17) 同上
 (18) 『火葬』 十四 p. 412
 (19) 『火葬』 二十七 p. 481
 (20) 『火葬』 二十七 p. 481
 (21) 『火葬』 十五 p. 418
 (22) 『火葬』 十六 p. 421
 (23) 『火葬』 十七 pp. 427-428
 (24) 『火葬』 十七 p. 428
 (25) 同上
 (26) 『火葬』 十八 p. 436
 (27) 『火葬』 三十二 p. 508
 (28) 同上
 (29) 『火葬』 三十二 p. 509
 (30) 『火葬』 二十七 pp. 484-485
 (31) 『火葬』 十三 p. 408
 (32) 同 (12)
 (33) 平松圭子氏は(2)の資料で、この夢蓮について「『火葬』の王夢蓮も『四世同堂』の招第も行くづまったときの気持ちを『ピストルが一丁ほしかった』という言葉であらわしている。招第は日本軍から特務教育を受け、母と二人で北京中をふるえあがらせてやりたいと思っている娘であり、夢蓮の方は父の八方美人的な処世術に悩み、劉二狗の圧迫に苦しみ、恋人の死を通して抗戦に目覚めてゆく。行動はあい反するが、二人とも幼少から甘やかされて育ち、男友達のだれからもちやほやされるのを喜ぶ共通点をもっていた。ただ夢蓮は良家に育ち、いざとなると臆病になる。この性格は招第の姉、高第に受けつがれてはいまいか。」と述べている。筆者の夢蓮に対する見解とはいくらか異にしている。ただ、『四世同堂』との関連については今後の課題である。
- (付記) 本稿は科学研究補助金（基盤研究(C)「中国における家族の文学表象の形成と展開に関する基礎的研究」代表西上）による研究成果の一部である。